

博物館における自然史の再評価

Revaluation of Natural History in Museums

小出良幸

Yoshiyuki KOIDE

Abstract. Natural history is significant as a system of all-round and interdisciplinary knowledge. Museums of natural history should play a role as facilities of life-long learning and academic center. The natural history and museums, however, are valued insufficiently at the modern society. It is necessary to reevaluate an importance of natural history. The modern natural history should work as the trinity of natural science, modern natural philosophy, and education of natural history. Persons having literacy of natural history could be cultivated by the trinity, and they could assume the next generation, and renew the natural history. Conclusively, the trinity should lead to accumulate intellectual property of human being.

Key words: natural history, museum, natural science, natural philosophy, education of natural history, literacy of natural history

I はじめに

現代の閉塞感、単に不景気という経済的理由だけではなく、科学や社会全体の潮流に由来するものである。混迷を続ける現代社会は、営利至上主義による限界と破綻によるものである。学問の行き詰まりは、近年までドクマ的方法論であった要素還元主義が崩壊したためである。このような潮流を考えると、営利主義や還元主義によらない総合的あるいは学際的な視点の導入の重要性が見えてくる。総合的、学際的学問体系の一つとして、自然史が挙げられる。しかし、自然史は、他の科学と比べると、現在、低迷している。

自然史は、自然に関する資料をあつかう。ここでいう自然とは、身近な地域のものから、広く大陸や海洋、地球全体にまでおよぶものである。かつて西洋において自然史が隆盛を極めたように、東洋でも西洋の自然史と似た学問体系として本草学が盛んに研究された。しかし、かつての自然史や本草学をそのまま展開するのではなく、現代という時代や社会の要請に応じた新しい自然史として対応する必要がある。

本稿の目的は、現代版の自然史の重要性を再評価すべ

き時代になっていることを示すことである。そのために本稿では、博物館とは何かを問いただし、時代の要請として自然史が重要な役割を果たすことを示す。

本稿をまとめるにあたって、神奈川県立生命の星・地球博物館の学芸員、試験的企画に参画して下さった方々に感謝する。

II 博物館とは

1 定義

博物館の英語、Museumは、ギリシア語の *mousetion* が語源である。古代ギリシア時代の *mousetion* は神殿という面が強かったが、紀元前280年頃アレクサンドリアに建てられた *mousetion* は、今でいう学術センター的なものであった(椎名, 1993)。そして、現在の博物館の目指すべき方向性は、まさに、この学術センター的なものであると考えられる。

昭和26年に制定された「博物館法」では、博物館とは、「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して(中略)資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」(第二条)と定義され、「博物館に、専門的職員として学芸員を置」(第四条三)き、「学芸員は、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどる」(第四条四)とされている。また、ICOM (International Council of Museums、国際博物館会議)の1989年に制定された憲章では、博物館とは、「人間と環境に関

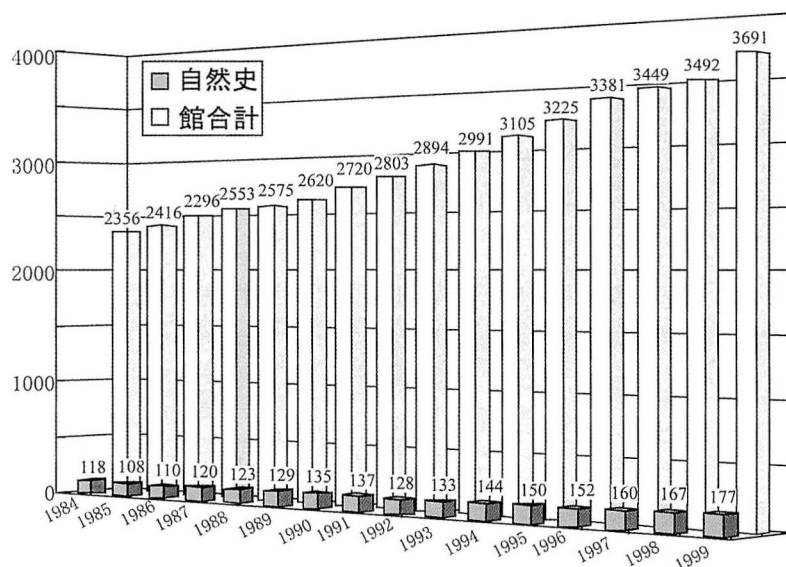


図1. 博物館数の変遷. 日本博物館協会に登録されている博物館(館合計)と自然史博物館の年度ごとの館数を示した. データは日本博物館協会(2000a)による.

する物質的証拠を収集、保存、研究、伝達、展示をして、公共のために公開」(Article 2, para. 1)し、「一定の倫理規定を尊重する特別の研修を受けたものか経験を持つ専門職員」(Article 2, para. 2)がいるところとされている。

上記の定義や特徴は、多様化する博物館の全体像を必ずしも表していないかもしれないが、大枠は捉えているのではないだろうか。加藤(2000)によれば、博物館の機能として、資料の収集、資料の整理・保管、資料や活動上必要な調査・研究、および教育普及の4つを挙げている。また、小出(1999b)は、生涯学習施設における博物館の特徴として、実物資料が大量にあること、資料・情報が系統的に集められていること、サービスの対象が一般の市民にあること、の3点を挙げた。博物館活動は、学芸員が有効に機能することによって始めて活かされるものである。

2 必要性

日本において、博物館の数は、毎年増加している(図1)。日本の博物館は、1999年3月31日現在で、3,691館あり、自然史博物館は、177館にのぼる(日本博物館協会編, 2000a)。一方、生涯学習施設である公民館は1万7000館、図書館は2400館ある。日本の高等教育施設である大学は622校、短期大学は585校ある。施設数で見ると、公民館や図書館と同様に、博物館は重要な生涯学習施設であることがわかる。このような生涯学習施設の充実の背景には、社会の成熟化、社会の高度化、学歴社会の弊害の是正があるといわれている(大堀, 1999)。

博物館には、年間1億7000万人の入館者数が、自然史館には700万人の入館者があった(日本博物館協会編, 2000b)。公民館は年間1億人、図書館は3000万人であった。大学の在学者は、大学270万人、短期大学38万人で、本務教員は、大学15万人、短期大学1万8000人である(図2)。学校で学べる人数や世代を考えると、生涯学習時代の現代において、現存の学校だけは充分でな

く、より多くの施設や人材が必要であろう。

このようなデータは、統計の取り方に違いがあるため、定量的比較は難しい。しかし、少なくとも日本における生涯学習施設では、博物館が需要の高い、あるいは馴染みのある施設ということを示している。将来においても、博物館の内容の充実あるいはさらなる増設は不可欠である。

3 目標

小出ほか(1999a)は、博物館を取り巻く現状を多角的に分析、総括し、博物館の現状は決して満足できるものではなく、限界があることを示した。小出(1999b)では、博物館の限界を、時間的限界、空間的限界、知的限界、量的限界の4つにまとめた。4つの限界は、4つの目標に転換できると考えられる。以下では、限界をいかに目標と読み替えるかを考える。

市民が博物館の情報を必要とするのは、決まった時間ではない。従来の博物館の開館時間では、職種や階層によっては、全く利用できない。現状の博物館には、時間的限界が存在する。しかし、時間的限界を越えて、「いつでも」博物館の情報を利用できることが理想である。

利用したい時、博物館にすぐ行けるわけではないし、ある博物館しか持っていない情報は遠くてもその博物館に行かなければならない。このような空間的限界を越えて、「どこでも」利用できる博物館の情報提供が望まれる。

博物館の情報は、網羅的にかつ選択的であることが求められる。市民からの問い合わせの多くは、広く浅い網羅的内容である。一方、資料に関する専門的情報が、選択的に収集される。選択的情報は、博物館では長年にわたって実物資料と共に系統的に収集される。選択的情報は、専門性が高いが、博物館が自然の研究面で果たすべき重要な役割と位置付けられる。多岐にわたる情報を公開するにあたっては、知的限界を設けられている。例えば、小学生高学年の学童に理解できるような情報提供

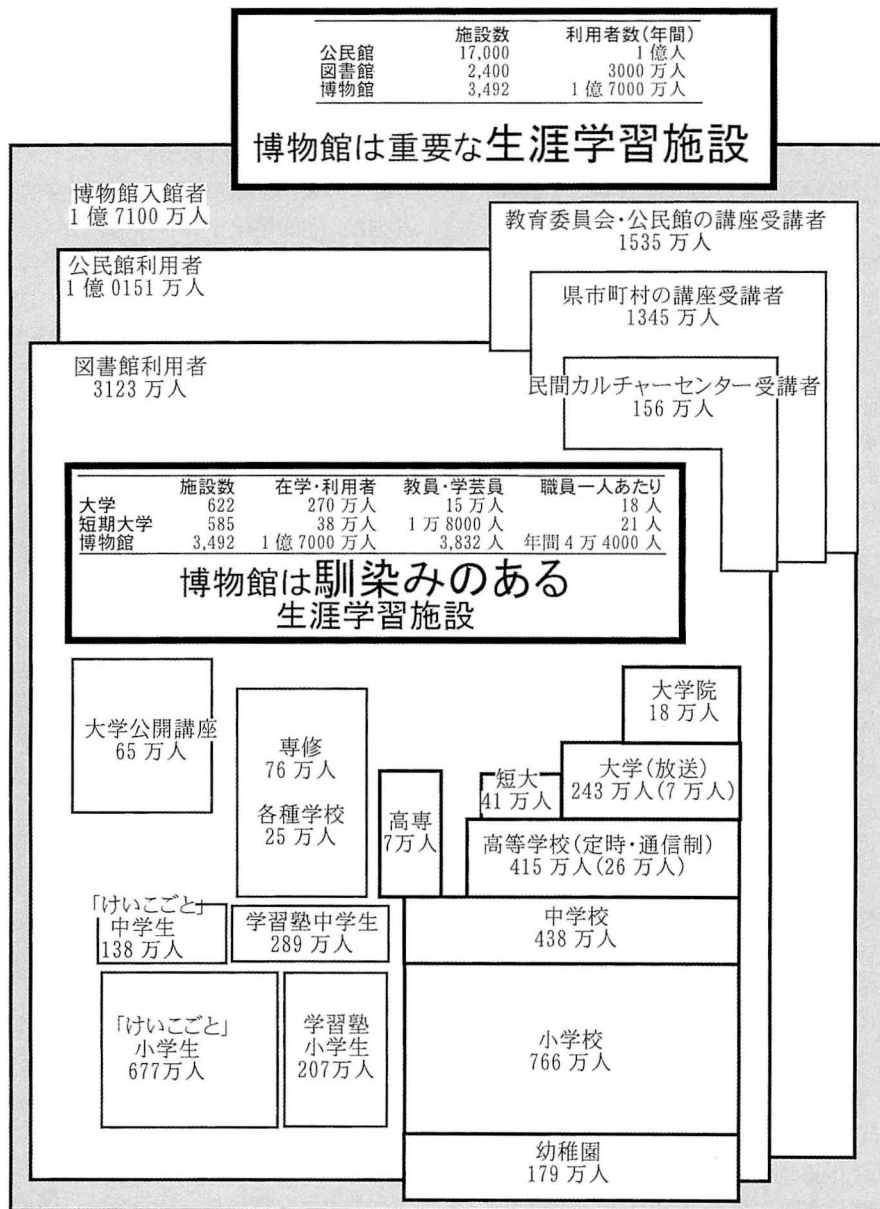


図2. 生涯教育および学校教育の利用者数。データは、図1や文部省の社会教育基本調査(文部科学省, 2001a), 学校基本調査(文部科学省, 2001b) および日本博物館協会(2000b)の統計による。

は、低学年学童や幼児には難しいし、専門家には情報不足となるであろう。現実の展示では、情報提供の量には限度があるため、何らかの知的限界が設けられている。どんな知的レベルの要求に対しても情報提供できるような「だれでも」利用できる博物館が理想となる。

博物館の観察会や実習、講座などの普及活動は、非常に多くの回数おこなわれているが、供給より需要が多い。人数や定員、実施回数などの量的限界を越えて、「いくらでも」参加・利用できるものが理想である。

現状分析から明らかになった4つの限界は、その限界を越えることを目標とすれば、今後の博物館の方向性が見えてくる。つまり、「いつでも、どこでも、だれでも、いくらでも」利用できる博物館が理想で、これが博物館の目指すべき方向であろう。

III 自然史とは

1 自然史という用語

日本では、natural historyの訳として自然史あるいは自然誌が用いられる。語源や実際の学問の歴史からして「Natural historyを自然の歴史と解するのは誤り」(千地, 1979)であり、「自然誌」という用語が適切である(例えば、三枝, 1950; 駒井, 1968; 大場, 1991; 沼田, 1994; 糸魚川, 1996など)。しかし、大阪市立自然史博物館は、「自然と人間のかかわりとその歴史の科学を通じて人間にとって自然とは何か」を理解しなければならないので、あえて自然史と訳し用いている(千地, 1971; 1975)。その後、自然史を名乗る多くの博物館がつけられた。糸魚川(1996)は「現在の姿を記述するということは、もちろん非常に大切なことであるけれども、もう一つ、そういう物がどういう経過を経て成立したことかということ

も大切」であるという位置づけで使った。つまり、自然の歴史性（時間、変化、進化など）を重要視するために自然史という用語を意識的に用いたのである。

以上のように、自然史と自然誌の両者が、現在使われている。意識的に、どちらかを選択して使われることもあり、両者とも定着している場合もある。現状でそれほど混乱があるわけもないので、統一する必要もないかもしれない（日本博物館協会編, 1999）。

本稿では、自然史という語を使っている。それは、著者自身が地質学にたずさわっており、自然現象の中に歴史的側面を見る場合が多く、史的観点による自然誌の記述が必要と感じる場面が多々あるためである。著者には、自然誌より自然史のほうがなじみよいという理由だけで用いている。

2 自然史の歴史

西洋では自然史に関する記述は古く、ギリシア時代のアリストテレスの "Historia Animalium" まで遡り、ローマ時代のプリニウス (Gaius Plinius Secundus) の 77 年刊の "Naturalis Historia" が最初の Natural history という述語の使用とされる (千地, 1998)。

近代ヨーロッパは、ルネサンス、大航海時代、宗教改革の3つの潮流による神学的世界観の大転回で始まった (木下ほか, 1995)。近代ヨーロッパの成立とともに、自然史が大いに開花した。資料の増大、印刷技術の発達、科学的自然観の構築、分類学の確立などが、その主要な要因と考えられる。

17 世紀初期のデカルトの思想に基づく機械的自然観や、ベーコンの経験主義による先入観のない自然観察が、科学の基本的考え方となった。このような科学的自然観に基づく、自然史の研究者が、18 世紀に現れた。リンネ (Carl von Linné) の人為分類法と、ビュフォン (Georges Louis Leclerc de Buffon) の自然的分類法がその象徴といえよう。ビュフォンの自然分類法は、総合的に自然を見て分類するもの (糸魚川, 1993) であったが、19 世紀の学問の細分化と要素還元主義的科学観によって、総合的な自然史は衰え、リンネの分類法が残った。

中国では博物という言葉は古くから使われている。一番古い記録は、晋の張華の撰によると伝えられている「博物志」全 10 巻であるが、当時の「博物」とは、広くものを知るという意味で、現在の「博物 (natural history)」とは違っていた (上野, 1973)。

また中国には、古くからものの名前と実物を対照する学問として訓詁名物と、本草学があった。紀元前 5～2 世紀には「爾雅」という書籍があり、名物についての訓詁がなされている (上野, 1973)。紀元前 30 年頃にはすでに「本草」という語が存在し (上野, 1989)、漢の時代には「神農本草」が成立していたといわれる (赤堀, 1988)。

日本の博物学の源流は、中国の訓古と本草である。

古代日本 (大和時代～平安時代) では、713 年の「風土記」に山野の草木禽獣の記載がある。918 年の深沢輔仁の「本草和名」は、日本最初の漢和薬名辞書である (宗田, 1988)。近世日本 (安土桃山時代～江戸時代) に、日本の博物学の礎ができた。江戸時代は、職業博物学者が

多く輩出した時代でもある。例えば、1612 年林羅山「多識論」、1697 年野必大「本朝食鑑」、1685 年下津元知「図解本草」、1770 年田村元雄「琉球産物誌」、平賀源内「物類品隲」などが代表的なものである (上野, 1973)。近代・現代日本 (明治時代から現在) では、西洋からの自然史の考えの流入によって、博物学は素朴な自然物の記述から、学問体系化されたものとなった (三輪, 1978)。

Natural history の訳語として、博物学から自然誌へ、そして自然史が使われるようになってきた (三輪, 1978)。その後、各学問の独自性が強くなり、物理学、化学、生物学、地質学などは、機械論や合理主義に基づいた自然科学 (natural science) へと転化した。記載中心の自然史の研究手法は継続されるが、その記載は合目的研究あるいは起源、原因、因果、規則性を追求するものへとやってきた。近年、全地球的・地球史的視点の必要性から、再度自然史的な視点の導入が必要となりつつある。

IV 現在における自然史

1 自然史への潮流

いつの時代でもその時の「現在」を、歴史の流れの先端とみなす視点は重要である。つまり、現在の現象を、過去からの潮流の中に読み解くのである。その結果、多くの課題や問題点が見えてくるはずである。その後の歴史を見ていくと、問題が解決されるものもあるが、長い年月を経ても解決できないものもある。しかし、歴史の潮流の先端に現在があるという見方で現状分析をすることは、非常に重要であり、多くの人が用いている手法である。

現代社会の問題点を、多くの分野で多くの識者が論じている。現代社会においては、一地域に端を発した問題が、最終的に地球規模の問題となる。あるいは、些細な人類の行為が、長い年月を経ることによって大きな問題となることも多い。したがって、現在社会の問題を考える時には、常に全地球的視点や、地球史的視座が必要となる。

そのような現代社会の問題を、小出 (2000b) は、利潤優先社会の破綻、自然と人類の乖離、人類による環境破壊、従来の科学・哲学の限界、科学技術万能主義の限界、要素還元主義の限界、学問の細分専門化の弊害、と要約した (図 3)。

資本主義経済は利潤を追求するがために、多くの負荷を自然や社会あるいは人類自身にかけてきた。その皺寄せとして、南北問題や食糧問題、人口問題、地球環境問題などの多くの場面で、「利潤優先社会の破綻」が起きてきた。このような破綻を解消するためには、「持続力のある経済・社会的視座」で「過不足のない社会」を目指す必要がある。

人類は、かつては自然と共存して生活していた。文明を持つことによって、自然の一方的利用をおこなうようになった。やがて自然は人類にとって共存の対象ではなく、搾取の対象となり、「自然と人類の乖離」がおこった。自然には、地球の歴史がその背景にあり、その歴史のつながりが切断されると復旧できないことや、資源のように限りがあることを、人類は学んできた。今重要なのは、取り返しがつかなくなるほど自然が破壊される前に、「地球史的視座」で、「人類の自然への回帰」を目指すこ

現状	目標	新たな視座
利潤優先社会の破綻	→ 過不足のない社会	→ 持続力のある経済・社会的視座
自然と人類の乖離	→ 人類の自然への回帰	→ 地球史的視座
人類による環境破壊	→ 生命と地球の共生	→ 地球・生命倫理的視座
従来の科学・哲学の限界	→ 無知の知	→ 自然哲学的視座
科学技術万能主義の限界	→ 科学の倫理	→ 全地球的視座
要素還元主義の限界	→ 不確実・複雑性の理解	→ 多様性を認める多角的視座
学問の細分専門化の弊害	→ 総合化	→ 学際的領域横断の視座

自然史が解決の糸口

図3. 現代社会の潮流。現代社会の潮流として、現状とその現状打開のための目標と、その目標達成するために導入すべき新たな視座をまとめた。小出(2000b)を改変。

とであろう。

人類は、生命の一部である。そして、人類は、他の生命あるいは生態系を利用して、生を永らえている。しかし、現状は、一個体が必要とする以上に、他の生命を犠牲にし、利用して、生態系や環境を破壊してきた(「人類による環境破壊」)。私たちは、生態系破壊の影響を、やがて自分自身に危険が及ぶことを環境問題として知った。「生命と地球の共生」を目指すために、「地球・生命倫理的視座」を導入する必要がある。

学問は、進めば進むほど知識は増大し、発展し、その限界がないかのように見えていた。しかし、実際には各分野で「従来の科学・哲学の限界」が見えてきた。例えば、古典力学は万能ではなく、適応範囲があることを相対性理論から教わり、相対性理論も量子力学から教わった。紀元前にすでに存在していた「自然哲学的視座」を再度導入して、私たちは「無知の知」を持ち、より根源的な視点をもって科学や哲学に取り組む必要がある。

20世紀は科学の時代といわれるが、その行き着いた先が、「科学技術万能主義の限界」である。科学は非常に強力な「道具」だが、その使用を間違えると、取り返しのつかない事態を引き起こすことがある。例えば、少量の化学物質が、環境ホルモンとして種の絶滅の危機を招き、少量だが長時間の蓄積によってオゾン層の破壊をおこしている。今や「全地球的視座」で「科学の倫理」をもって、利用しなければならない時代となってきた。

17世紀のデカルトの合理主義から21世紀の現在に至るまで、科学に代表される要素還元主義は、成功を収めた。しかし、近年、その「要素還元主義の限界」がみえてきた。すべてのことが原因と結果によって起こるのではなく、予測不可能なことや、不確実で複雑なことがあることを学んだ。「多様性を認める多角的視座」の導入が「不確実・複雑性の理解」には必要となる。

科学や社会の進歩によって、多くの学問分野が設立され、細分化・多様化が起こってきた。「学問の細分専門化の弊害」として、科学分野の情報流通の不足による誤

解や無駄などが多々あった。「学際的領域横断の視座」による「総合化」が、今後の科学や社会の効率的発展には必要である。

このような全視座を提供する基礎的な学問体系が自然史であると考えられる。あるいは、全地球的・地球史的視点を培うためには、自然史のような学問が重要な役割を演じる。それは、以下で述べるように、自然史が、個々の身近な自然の記載から、総合科学あるいは学際的学問としての性格を持つからである。そして、自然史は、身近なものから総合的・学際的なものまで整合的に連結してくれる。現代社会あるいは科学の行き詰まりを打開するためには、還元的科学だけでなく、総合的・学際的科学として自然史の充実が急務である。

2 自然史の必要性

糸魚川(1998)は、自然史を「自然のありのままのすがたと生い立ちを総合的に研究する学問」とまとめた。著者も同意見で、現代的な自然史を目指すべきであると考える(図4)。

自然史の中心素材は、「地域の自然」や「もの」である(糸魚川, 1991)。そして、広くは「地球」や「惑星」、「宇宙」にまでおよぶ。

自然史の基本は、まず身近なありのままの自然に接し、調査し、研究することである。つまり「地域性」こそ自然史の出発点である。「地域性」から出発した研究成果は、自然史の全体系の中で位置づけられ、全地球的・総合的視点として市民に伝えられなければならない。

自然史の目指すべき方向は、前述の時代や社会の潮流より、以下のようにまとめられる。自然史は、自然をありのままに見、さまざまな視点で捕らえ、長い歴史の結果として現在の自然があることを理解し、より高次の規則性や原理、法則を見出そうというものである。

「自然をありのままに」とは、地域の自然や実物などの記載に基づく「自然への回帰」への動機付けを意味する。「さまざまな視点で捕らえ」とは、人類と生命と地

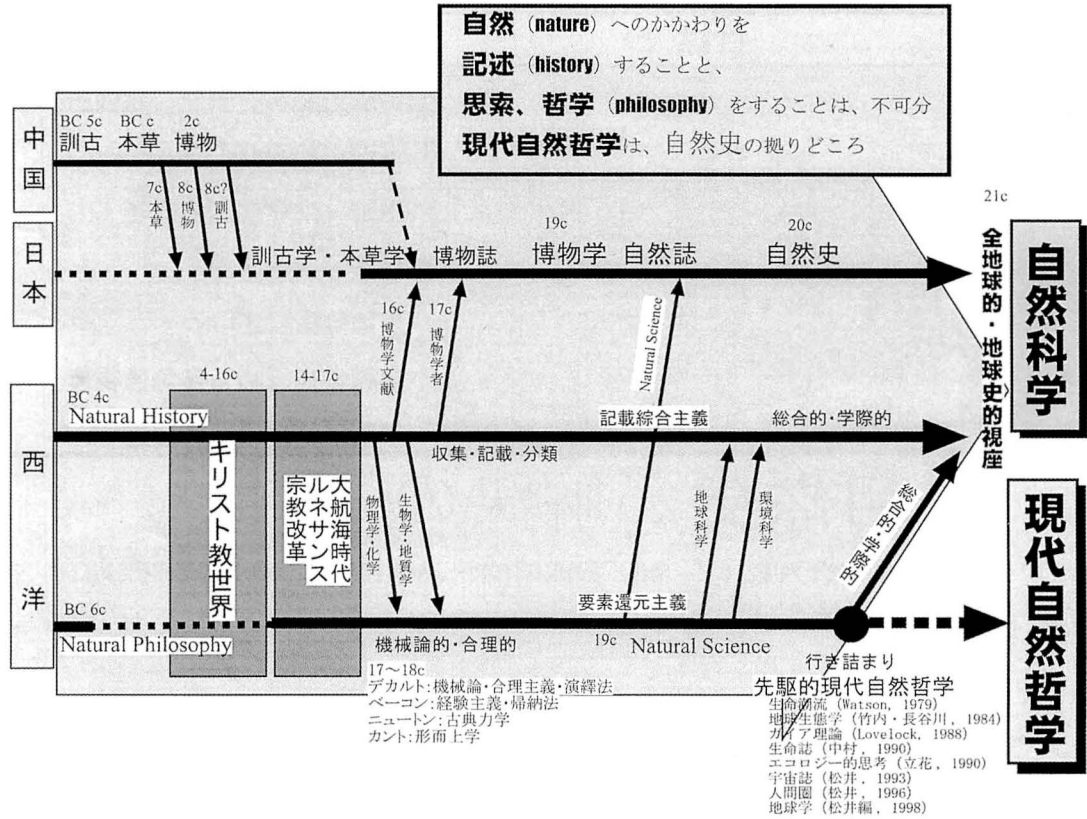


図4. 自然史の潮流. 現在の自然史の必要性を再評価にいたるまでの歴史をまとめた. 西洋と東洋(中国と日本)での自然史と関連する事項の歴史をまとめた. 小出(2000a)を改変.

球の関係を学際的視点で見る全地球という自然観(全地球観)である。「長い歴史の結果として現在の自然があることを理解」するとは、地球の歴史観(地球史観)を持つことである。「より高次の規則性や原理、法則を見出す」とは、人類、生命、地球や宇宙などを総合的に捉える視点(現在自然哲学)である。地域性と全地球的という自然史のあり方は、上述のように整合性をもっており、今後、科学全体の中で重要な役割を担うべきである。これが、著者の考えている自然史の体系である。

今まで述べてきたことを考え合わせると、自然史の研究および自然史に関する科学教育は、博物館が中心となっておこなうのが最適であると考えられる。その理由は、博物館には、大量の実物コンテンツとそれに関連する自然史ドキュメントが蓄積されているからである。言い換えると、博物館は、自然史における学術センターの役割を果たさなければならないであろう。

3 自然史の体系化

従来の要素還元主義的科学の行き詰まりを解消するために、総合的・学際的学問の必要性が認識されるに至った。自然をありのままに(地域の自然や実物などの記載)、さまざまな視点で捕らえ(学際的視点による研究)、より高次の規則性や原理、法則を見出そう(総合的視点による研究)という自然史は、上述のように、現在の科学の閉塞感を打破する有効な学問分野であるといえる。

自然(nature)へのかわりとして、記述(history)することと、思索や哲学(philosophy)をすることは、かつては不可分であった。現代では、科学とは哲学は連動

することは少ない。しかし、総合的・学際的学問としての自然史の重要性が増せば、考える姿勢として、哲学の重要性が増してくるのではないだろうか。科学の総合化・学際化の潮流は、科学をより広く、人間と科学、地球と科学、生命と地球などでの視座を求めている。そこで必要なのは、プラトンやアリストテレスらの主張した自然と人間の全一的・総合的な視点、つまり現代版の自然哲学の復興ではなからうか。その任に当たるのが学芸員である。学芸員は哲学者であるべきである。

自然史の中心素材は、「地域の自然」や「もの」であり、広く「地球」や「惑星」、「宇宙」にまで及ぶ。身近なありのままの自然に接して、調査研究し、そこから生まれた成果は、総合的・学際的見地で体系化され、自然科学となる。その任に当たるのも、学芸員である。学芸員は研究者でもある。自然科学は、今では著しく細分化がされているが、自然史における自然科学は、地域の自然や実物を中心とする総合的学際的な科学を目指すべきであろう。

自然史には、さらにもう一つ重要な機能が必要である。自然史教育である。それは、自然史リテラシーをもった市民を育成することである。自然史リテラシーとは、自然史に関する基礎的な素養あるいは教養のことである。自然史の中では、普及教育が重要な役割となっているが、その最終的な目標は、自然史リテラシーをもった人材の育成であろう。自然史教育で、自然科学と自然哲学の体系を、わかりやすく市民に伝えられ、次世代に継承され、次世代の学芸員が育成されることを理想とする。自然史リテラシーを作り上げるための理論や方法論をまとめ、それに基づいて実践的活動をして実証しなけ

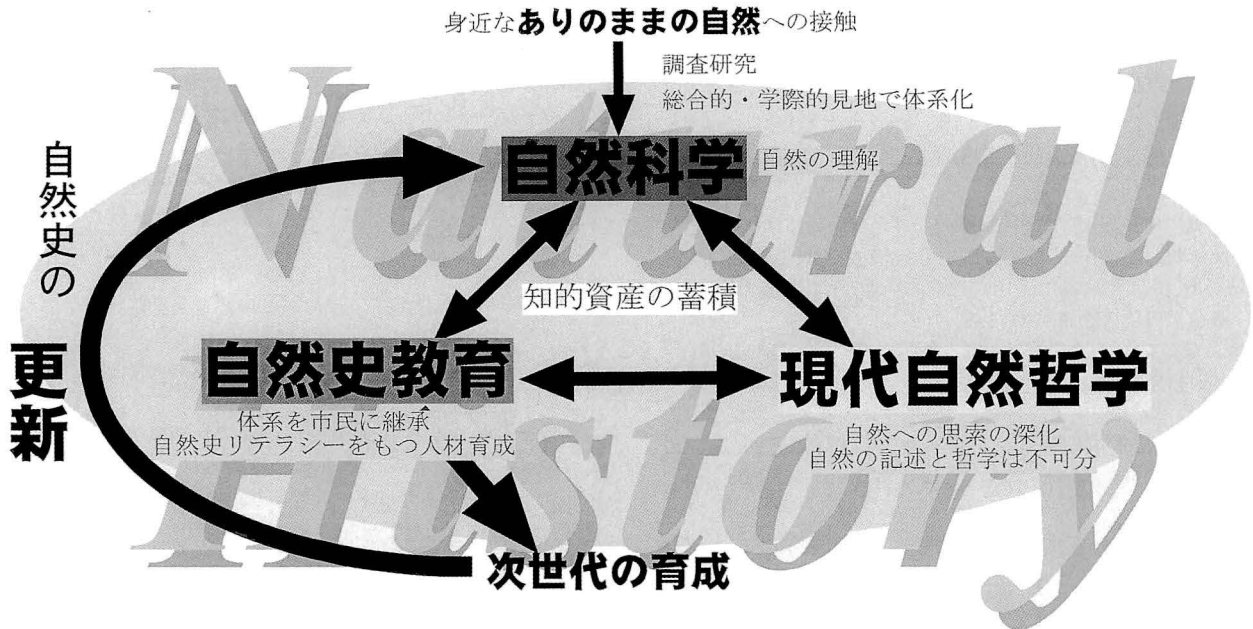


図 5. 自然史の三位一体. 自然史は、自然科学、自然哲学、自然史教育の三つの体系が連動して、機能することが重要である。

ればならない。情報や人材、知的資産の集積度を考えると、実物に基づいた自然科学や自然史リテラシーは、博物館において行うことが一番適切であると考えている。

自然史においては、自然科学と自然史リテラシー、現代自然哲学が三位一体となることが重要であろう。三位一体によって、自然史が体系化され、構築されるであろう。このような三位一体のサイクルが機能すれば、自然史は、持続性、発展性のある学問・哲学・教育体系となるであろう。そして最終的に人類の知的資産が蓄積されていく(図5)。

これが、目指すべき自然史の体系化のための全体像である。

4 現代の自然史の応用

上述のような自然史の体系を充実することによって、現状の問題点が解決できることが、いくつかある。それは、地域性の充実のために「輸入文化からの脱却」と、自然史のもつ地域性の象徴である実物への回帰として「バーチャルからリアルへの転換」である。

「輸入文化」からの脱却は、地域性の充実のための固有文化の発信によって可能となる。

今までの日本の文化や科学の特徴として、欧米の獨創性を活用することが多く、日本固有のものは少ないといわれてきた。特に技術の面においてはこの傾向が強かった。近年、世界競争の中で生き抜いてきた日本の技術力は、今や世界有数のものとなっている。しかし、文化においては、音楽や芸術、ファッションなど「輸入文化」といわれるものが、未だに日本の主流を形成している。

どの地域にも固有の文化や固有の自然は多数あり、それは世界に誇れるものである。このような世界に誇れる素材を利用すれば、世界に向けて情報発信ができる。そもそも自然史においては、高低はなく、地域性や実物を活かす限り、「輸入文化」などはありえないはずである。

日本でも地域性を反映した自然史を体系化すれば、日本固有の自然史が構築できるはずである。日本の教育水準は高く、研究者密度が高いことから、日本固有の自然をすぐにも発信することが可能である。それを世界に発信すれば、自然史に関しては簡単に「輸入文化」からの脱却が図れる。情報発信をインターネットのホームページからおこなえば、だれでも簡単に世界中の人への情報発信が可能である。少数の人間でも、日本の自然史の確立に向けてスタートすることが可能である。

博物館においてインターネットの利用が今後増えると考えられるが、博物館の情報発信がバーチャルに片寄る可能性がある。「バーチャルからリアルへ」とは、リアルつまり自然史の基本素材である「地域の自然」や「実物」をつねに忘れないという意味である。

今や生活や研究活動の一部あるいは多くの部分は、コンピューターを介しておこなわれている。特に研究活動のデスクワークはほとんどコンピューターに向かうことが多い。日常生活の多くの部分でバーチャルな世界にすることが多い。自然史の基本はリアルであるから、リアルつまり「地域の自然」や「実物」を忘れることなく、バーチャルの世界を巡る必要がある。よって、今、あえて「より自然に近く」という意味で、「バーチャルからリアルへの転換」という言い方をすべきであろう。

自然史の目指すべきものと、情報発信は相反する方向性のようだが、以上述べたように調和的なのである。

V さいごに

何人かの識者が、自然史の必要性を説いている。彼らのいう自然史は、従来の記載学的自然史ではない。本稿でも自然史は、「地域の自然」や「実物」の記載から端を発し、総合的かつ学際的体系に至るすべてであるとした。社会や科学の潮流を見ても、今後ますます自然史の重要性が増すであろう。かつての自然史を再評価して、現在版自然

史を構築する必要がある。これは、現在の自然史博物館を支えている全学芸員の重要な責務であるといえる。

引用文献

- 赤堀 昭, 1988. 神農本草. 下野弘編, 世界大百科事典 14. 平凡社, 東京. 437pp.
- 千地万造, 1971. 自然史博物館のゆくえ. 大阪自然科学博物館館報, 5: 1-3.
- 千地万造, 1975. 博物館づくり—歴史的経過と基本的な考察. 大阪自然科学博物館館報, 特別号: 2-14.
- 千地万造, 1979. 自然史博物館. 加藤有次編, 博物館講座第1巻博物館学総論, 163-172. 雄山閣出版, 東京.
- 千地万造, 1998. 自然史博物館—人と自然の共生をめざして—. 八坂書房, 東京. 253pp.
- 糸魚川淳二, 1991. 自然史学のこれから博物館. 月刊地球, 13: 688-693.
- 糸魚川淳二, 1993. 日本の自然史博物館. 東京大学出版会, 東京. 228pp.
- 糸魚川淳二, 1996. 自然史博物館はいま. 丹青研究所編, MUSEUM, 34-74. 丹青研究所, 東京.
- 糸魚川淳二, 1998. 新しい自然史博物館. 東京大学出版会, 東京. 568pp.
- 加藤有次, 2000. 現代博物館総論. 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編, 新版・博物館学講座第3巻, 3-22. 雄山閣出版, 東京.
- 木下康彦・木村靖二・吉田 寅, 1995. 詳説世界史研究. 山川出版, 東京. 229pp.
- 小出良幸, 1999a. 地球科学と教育を取り巻く現状分析—博物館の新しい地学教育を目指して1. 地学教育, 52: 127-147.
- 小出良幸, 1999b. 博物館の現状分析と目標—博物館の新しい地学教育を目指して2. 地学教育, 52: 169-176.
- 小出良幸, 2000a. 自然史の重要性と現代自然哲学の必要性. 地学教育, 53: 141-158.
- 小出良幸, 2000b. 自然史学の視点からの地学の大切さ. 日本地学教育学会編, 日本地学教育学会シンポジウム「地学の楽しさと大切さを知ろう」, 8-11.
- 駒井 卓, 1968. 自然史という呼び方について. 自然科学と博物館, 35: 7.
- 三枝博音, 1950. プリニウスと自然誌の問題(1). 科学史研究, 13: 163-169.
- 三輪 克, 1978. 自然観・技術観と自然科学系博物館の課題. 伊藤寿朗・森田恒之編, 博物館概論, 60-69. 学苑社, 東京.
- 文部科学省編, 2001a. 平成11年度版社会教育調査報告書. 文部科学省編, 2001教育統計データCD-ROM Vol. 2. 東京, CD-ROM.
- 文部科学省編, 2001b. 平成12年度学校基本調査報告書. 文部科学省編, 2001教育統計データCD-ROM Vol. 1. 東京, CD-ROM.
- 宗田 一, 1988. 本草和名. 下野弘編, 世界大百科事典 26. 平凡社, 東京. 515pp.
- 日本博物館協会編, 1999. 日本の博物館の現状と課題 (博物館白書 平成11年度版). 日本博物館協会, 東京. 337pp.
- 日本博物館協会編, 2000a. 平成10年度博物館園数. 博物館研究, 35(3): 9-12.
- 日本博物館協会編, 2000b. 平成10年度博物館入館者数. 博物館研究, 35(3): 13-15.
- 沼田 真, 1994. 自然保護という思想. 岩波書店, 東京. 212pp.
- 大場達之, 1991. 地域自然誌博物館の役割. 月刊地球, 13: 697-702.
- 大堀 哲, 1999. 博物館教育活動の目的と意義. 加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司編, 新版・博物館学講座第10巻, 3-18. 雄山閣出版, 東京.
- 権名仙卓, 1993. 図解博物館史. 雄山閣出版, 東京. 195pp.
- 上野益三, 1973. 日本博物史. 平凡社, 東京. 680+73pp.
- 上野益三, 1989. 年表日本博物史. 八坂書房, 東京. 470+68pp.

摘 要

小出良幸, 2002. 博物館における自然史の再評価. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (31): 1-8. (Y. Koide, 2002. Reevaluation of Natural History in Museums. *Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.)*, (31): 1-8.)

現代社会において、総合的、学際的学問体系として、自然史は重要であろう。そしてその実践の場として、自然史博物館が中心的学術センターの役割を果たすであろう。しかし、現状の自然史や自然史博物館は、社会的認知度が低迷しており、その重要性を再評価する必要がある。新しい自然史として、自然科学、現代自然哲学、自然史教育の三つが一体として、連動し、機能しなければならない。その結果、自然史リテラシーをもった人材が育成され、次世代を担い、自然史の継承、更新がおこなわれる。最終的には、このような三位一体が、人類の知的資産を蓄積することになる。

(受付: 2001年12月5日; 受理2002年2月7日.)